

---

# メモダス

yuunagi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メモダス

### 【Zコード】

Z0270BA

### 【作者名】

yuuna\_gyu

### 【あらすじ】

暴君こと水無月アスカのせいで春休み最後の休日を返上する事になつた如月瑞希とアスカの弟、水無月アキトの二人はいつも通りこき使われていた。その日の帰り道、瑞希は不思議な雰囲気を漂わすシスターと出遭い、他愛のない会話をした次の日にシスターさんと見た目がそつくりな転入生が登校初日に突然「私は……私を殺せる人を探しにここへ来た」と、爆弾発言をしてクラスを凍りつかせたのだが……。

不思議な不思議な夢を見た。

周りには何もない見渡す限り真っ白な景色が広がる空間にポツリと佇む一人の少女……。

虚ろな表情を浮かべながら上を見上げて細くてしなやかな透き通る肌質の両腕を差し出して何かを求めているような。まるで、この何もない真っ白な空間から誰かが手を差し伸べ助け出してくれる事を待ち続けているようだった。

けれど、それは叶わぬ願いだと少女は薄々感じていた。時の流れさえ不確かなる空間で一体どれだけの歳月が経過したのだろうか。いつからこのような事を続けているのだろうか。そして、いつまで続けるべきだらうか……。

それでも少女は眉一つ動かさず、虚ろな表情のまま差し出した腕を下ろさずに続けた。それが叶わぬ願いだらうとなんだらうと少女は少しでも可能性があるならと、祈りを捧げるようになまけの無い瞳をゆっくり閉じて

「はい。却下」

呆れ果てた表情を浮かべてテーブルに叩きつけるように弔子を投げ飛ばし無情にも没宣告を告げるカチューシャを付けたセミロングの凛々しいお顔立ち、すらりと伸びた手足に非の打ち所が無い出るどこ出たコケティッシュな体躯の少女。水無月アスカは窓に寄りかかるように身を預けた。

「決断早えよ、姉貴！」

アスカの無情な宣告に納得いかずテーブルを勢いよく叩き、立ち

上がりながら怒号を上げた少年。少女と瓜二つの顔付き、筋骨隆々とまではいかないが長身のがつちり体型である弟の水無月アキトは怒号を上げた後に静かに着席した。

「アキの言い分は分かるわ。だけど、根本的につまらない」

眉一つ動かさず淡々とした口調で吐き捨てるようにアキトの書きあげた最初で最後の今世紀最大の作品を酷評したアスカは額を押えて大きく嘆息する。

まだ、序盤中の序盤。出だししか目を通していないのに、判断を下すのは少し早計過ぎやしないか、と心の内に留めながらも顔に出でてしまっていたのか。アスカが眉間にしわを寄せてこちらを睨みついているのに気付き、僕は目を逸らし少し咳き込みながら誤魔化した。

「まあ、いいわ。私がアンタ達に期待したのがそもそも間違いだつたわ。やっぱりこの退屈過ぎる生活を打破する為には私自身どうにかするしかないわね」

腕を組み仁王立ちをして凜々しい態度で僕達の事を嘲笑うかのように切り捨て、顎に手を添えて何か企んでいるのか思案顔になつた。

つたく、だつたら最初から自分で何とかしろっての……。

僕が心の中でアスカに対し悪態をついていると弟であるアキトが姉に聞こえないように小声で、

「なあ～キサラ。そんなにつまらなかつたか、コレ……」

姉にボロクソに言われ、少しムスッとした表情を浮かべながら彼が書きあげた作品が綴じられた冊子をこちらに提示して僕に意見を仰いできた。

ふむ、と僕は冊子に手を伸ばして流し読みではあつたがアキトが書き綴つた「仮題 閉じられた少女」に目を通した。

主人公の少年が毎夜毎夜見る不思議な夢に登場する虚ろな表情を浮かべる少女は一体何者なのか？ なぜ、少女は真っ白な空間に閉じ込められているのか？ なぜ、少年はこのような不思議な夢を見るのかという話のようだ。

「いや、お前は頑張った方さ。初執筆の僕達にたつた十分で短編を書けと命令し、出来上がるや否や少し目を通しただけでつまらんと言つてテーブルに叩きつけるアレがどうかしているとしか思えん」アキトに労いの言葉をかけた僕は伸びをしつつ背もたれに寄りかかり天を仰ぐ。その際に少し椅子が傾きバランスを崩しかけたのは当然の事ながら秘密だ。

「姉貴の悪口を言つなあああ！」

突然、アキトは体を震わせながらアスカの悪口（？）を言つた僕に対して唾を撒き散らし頬を上気させて怒号を上げる。

「黙れ、シスコン！」

「いや、黙らんぞ！ あんなんでも俺の大切な姉貴だ！ 誰でもうと姉貴の悪口を叩く奴は俺が許さねえ！ 姉貴の悪口を言つていいのはこの俺だけだ！」

弟である俺だけの特権だと誇張したいのか、アキトは両親指で自分の事を指さして意味もなくはにかんでみせる。

「あ～だつたら、僕の代わりにお前の後ろで不気味に微笑みながら仁王立ちをしている姉貴に向かつて一言言つてくれ」

「承知した。ホント、あのクソビッチは

「ア～キ～く～ん。あのクソビッチって誰の事かなあ？」

僕の代弁者たるアキトの背後から口元を歪ませ凄惨な笑みを浮かべながら抱きつき耳元で囁く、ク 水無月アスカ様……。

アスカ様のしなやかでお美しい腕がアキトの首に絡み、最初は抵

抗をしていたものの徐々にアキトの顔色が青ざめていき、田が白目をむき口から泡を吹いていた。それを特等席で田の当たりにしていた僕は手を合わせて、

「南無～」

「まだ、死んでねえ～わ！」

ハアハア、とよっぽど苦しかったのだろう、アキトは肩をならし過呼吸のように必死に息を吸う。

「アキをいじめちゃダメよ。シゲル」

今し方、弟に行つた教育（？）という名の暴力的行為は何もなかつたかのようアスカは微笑み、あたかも僕がやつたかのように裝う。

「直接手を下したのはお前だろ？」

僕は一応ながら後ろにいると教えてやつたのだが、あの馬鹿が調子づいて口を滑らしたに過ぎない。決して誘導なんてしていいぞ。

「それはそれよ。そんな事よりもシゲルも私に何か意見がお有りなのかしら？」

笑顔のまま手と首をパキポキと鳴らし意見を言おうならば即手下せるように慣らし始めた。

「いえ、何にもございません！」

僕はアキトの一の舞になるのだけは避けるべく、ご機嫌を損なわないよう椅子からすぐさま飛び上がり深々く土下座をした。腕が三角に綺麗に折れていたと思つ。

「ん？ プライド？ ナニソレ？ モロモジワカンナイ……。

「そう、ならいいわ。それと今日はもう解散よ。また、明日からよろしくね」

そう言い残してアスカは野郎一人を残してすたすたと部屋を出て行つてしまつた。

僕は少し一安心して椅子の隙間を縫うように手足を伸ばして床に転げ寝る。

「アキト、生きてるか」

「……ああ、大分マシになつた」

肩をならして呼吸を整えていたアキトの生存確認を済ませた僕はゆっくりと瞳を閉じる。

『……はあ～』

野郎一人の大きな溜め息が部屋の中で虚しく木霊した……。

## 序 章／死にたがりの少女／ 前 篇 其の一

ちょうど一年前の入学式での事だ。

特にこれと言った趣味も楽しみもなく、毎日毎日作業のよう決まった時間に起き、決まった時間に食事を取り。何気なく学校に通っていた僕は何のこだわりもなく適当に選んだ高校に進学して、これから新しい学生生活が始まるぞと言った心構えもなく。ただただ無心で桜が咲き誇り風が吹くたびに舞い散る桜が成形する桜の絨毯を歩いていた。

僕と同じブレザー制服を着てこれから始まる高校生活に胸を躍らせてはしゃぐ同級生達を目の当たりにして僕は思わず首を傾げた。

当時の僕に　いや、今でもそうかも知れないが意味の分からない光景だった……。

別に娯楽施設に向かう道中つて訳でもあるまいし、何がそんなに楽しいのか。学校をテーマパークか何かと勘違いしている馬鹿なのか。

あるいは昔、中学の時に「学校楽しくない」などとほざいていた輩がいたがアレと同じ類の人間で学校と呼ばれる場所に何かを期待している阿呆なのか……。

そんな考えを巡らせながら到着した、これといった特徴もないどこにもある平凡な造りの公立高校……。適当に選んだだけあってこの学校の特色やら校風は全く分からぬし、僕が通う高校はこの学校で合っているのかさえ分からない。

だけど、体育館らしき建物に向けて歩く僕と同じブレザー制服を着た生徒達が周りにいるのだから合っているのだろう。第一、僕は入試試験などで何度も来ているはずなのだが、はつきり言つて全然記憶になかった。それどころか高校生になつた実感すらなかつた。考え方や気持ちが中学生の頃と何ら変わりがないからなのか、た

だただ通う場所が変わったという印象だけしかない。

ふむ、また退屈な作業の日々が始まるのか……。

演壇に立った校長なのか教頭なのか分からない中年代の男性が新入生に向けて話を始める。

周りの生徒達は演壇で流暢に話をする中年男性の話を真剣に聞き入っていたけれど、僕は校歌らしき歌詞が描かれた掛け軸のようない物の近くにあつた時計を眺めていた。早く時が過ぎるよう念を込めて……。

はつきり言つて苦痛だった。

季語を巧みに織り交ぜて上手く話しているつもりだろうけど、そんな事はどうでもいい。さっさと話を切り上げて解放してくれと願うばかりである。

すると、僕の想いが届いたのか話が終わり各自のクラスに向かう事となつた。

他のクラスの生徒達の波に呑まれないように辿り着いた何の変哲もない教室で、一年B組の教室で僕は目を付けられてしまつた。

いや、巻き込まれたと言つた方がいいのかも知れない。

自席に座つていると突然、見知らぬポニー・テールの女子生徒に、「君は、生きているの?」と訳の分からぬ事を平然とした態度で僕の目を見て聞いてきたのだ。

生きているの? と唐突に聞かれて呆気にとられながらも「はい、生きていますよ」と馬鹿正直に答えればいいのか分からずに黙つていると「私は、絶賛仮死状態中」とこちらは何も聞いちゃいないし何も言つていないので関わらず、女子生徒は嘆息交じりに訴えかけてきた。

この女子生徒がさつきから何を言つてているのか全くもつて謎だが、初対面の相手にする話では決してない事だけは理解できた。

「ねえ、退屈つて人を殺すと思わない？ 私は殺すと思つ。だって、生きてる心地すらしないでしょ？」

僕の反応なんて知つたこつちやないと言わんばかりに自論を展開する女子生徒に僕は少々気後れし、顔も引きずつっていたと思う。

「だからね。君も私と一緒に生きたいと思わない？ 君を一眼見た時にビビッと身体に電気が走つたんだ。私と同じ人種だとね……」

自分と同じお仲間を見つけて嬉しかつたのか瞳を輝かせ、少し語氣を荒げて言う女子生徒に僕は嫌気が差していた。

これが所謂空気が読めないって奴なのだろうか。ここまで人の顔色を間近で観える距離でいるのにも関わらず話を繰り出せるつてある種の才能を感じられる。それに傍から見ていると逆プロポーズをされているように見受けられるし……。

「いや、一人盛り上がつている所すまないが……僕は君が思つているような人間じやないと思つ」

「いえ、君は私と同じく退屈の日々を暮らす死者も当然の存在よ。浮遊霊のように流れに身を委ねながらでいいの？ 私はごめんだわ。折角この人格で生を受けたのよ。だつたらこの人格でしか味わえない人生を楽しまなきや損よ」

僕の言動で熱が入つたのか、バンと机を叩きさらりと自論を展開する女子生徒。

ああ、火に油を注いでしまつたな。さらに瞳をキラキラと輝かせている。それに思いのほか机を叩いた音が大きかったのか、周りにいたクラスメイト達が何事かとこちらを見つめているのに気付いた。

「君は生者になりたくないの？ 毎日が作業のような機械じみた

日々を送つてていいの？ 私は嫌だわ

それでも女生徒は周りの視線なんて知つちやーつちやねえと一蹴するかのように声を荒上げて口走る。

ああ、分かつた。これはアレだ。宗教か何かの怪しげな団体の勧誘なんだな。誘致入数のノルマを達成しないと現在置かれている地位から降格されるみたいなシステムか？だから、ここまで必死に熱弁しているんだな。まるでマルチ商法みたいだ。

うん、だとしたらだ。周りのクラスメイト達を巻き込む訳にはいかないよな。目を付けられたのは僕なんだし……。

まあ、本音を言えばクラスメイト達の事なんてこれっぽっちも考えていない。さつとこの状況を打破したい、ただそれだけだ。

「ああ、分かつた分かつた。降参だ。話なら後でたつぶりとビーッ  
ぶりと聞いてやるからこの場は引いてくれ」

僕は息を吐いて女生徒の熱意にやられて少し心が折れたように見せた。もちろん嘘だ。この状況を打破されすれば、僕の勝ち。後はとんずらすればいい。

「そう？ なら決まりね。じゃ、行きましょうか

女子生徒は手を叩きそつと僕の腕を掴んで走り出していた。  
僕は状況を飲み込めず呆気にとられる。この女生徒は僕の話を聞いていたのか？

いや、これっぽっちも聞いちゃいないな。

半ば強引に僕は女子生徒に引っ張られるような形で不本意ながら教室を後にすることになり、どういう道筋で辿り着いたかさえ分からぬ、とある部屋で僕は女子生徒と顔がそっくりな男子生徒と出会う事になつた……。

## 序 章／死にたがりの少女／ 前 篇 其の三

アキトと学校で別れてから僕は一人寂しく家路を歩んでいた。

「はあ～」

僕は学校を出てからずつとこの調子で溜め息を漏らしている。本来ならこの日が最後の春休みだつたはずなのだが、姫様のワガママに付き合う羽目になり休日がおじやんになつたからだ。まさか、僕達三人で　いや、実質一人、か……。入学式の準備をする事になるなんて思いもよらなかつた。それも当日の早朝にだ。無計画すぎる……。

こちとら気持ちよく安眠していたつて言うのに禍々しい着信音が何度も何度も部屋の中に鳴り響き、しつこいから出るや否や「学校に集合！ 以上」と一言だけ言い残して切りやがり、一矢の反論の余地すら与えてはくれない暴君……。

やむなく学校に行き、椅子やらを体育館に並べて準備が終われば、今度は姫様の暇つぶしに付き合わせられる羽目になり短編小説を書く事になつた。書き終わつたら書き終わつたで「つまんない」と一言で全てを一蹴し、僕たちの頑張りの結晶をテーブルに叩きつけて、入学式が終わつてからの片付けがまだ残つていていうのに一人で帰つてしまつた始末……。

全く……アスカのおかげで眠いし、しんどいしで散々な春休みの最後を迎える事になつてしまつた。

「はあ～」

周りにいた通行人にも聞こえるほどの大好きな大きな溜め息を僕は吐いた。僕はこの歳で苦労人なんだぞ、と少しあピール感を込めて

……。

そんな中、通学路である車やら通行人が往来する幹線道路をいつも通り黙々と歩いていると見慣れたはずの景色なのだが、なぜかこの時意味も分からず、いや意味なんてないのかも知れないが、とある一つの建物が目に付いてしまった。

僕の左手に木々や草花が生い茂る庭園のよつな敷地内に最近建てられたように錯覚させるほどの外壁が真っ白で茶色い屋根が特徴的な教会がぽつりと建っていた。

いや、存在していた……？

ふむ、元々あつたのならさすがの僕でも覚えているはずなんだが……。つて、毎日のように通る通学路だろうに覚えてない方がおかしいだろ。

しかし、幾ら記憶を遡つてもこの場所に教会があつた覚えがない。それに周りの通行人達も見えているのか見えていないのかは分かりかねるが別に気にも留めていない様子だ。

でも、何だらうこのモヤモヤ感は……。

ただの勘違いかも知れないけど、ちょっと顔を出してみる、か……。

どのみち家に帰つた所でやる事は一つしかない訳で、うん、寝るだけだ。

だつたら、やむなく休日返上したこの最後の春休みだつた日をアスカの言葉を借りれば、どんな状況だろうと楽しまなきゃ損よ、だ。

……ああ、アスカに毒された、かな？

僕は首を振つて「大丈夫。毒されていない」と自分に言い聞かせてから幹線道路から逸れて教会に行く事にした。

板チョコがそのまま取り付けられたような扉のノブに手を伸ばし、何となくだがこういう神聖な場所に踏み入るのだから礼儀作法を忘れちゃいけないと思い扉を軽くノックをして、

「失礼します」

と、細々と言つて僕は教会に恐る恐る足を踏み入れた。  
教会内は窓から差し込む光に照らされ和やかな雰囲気に包まれ、  
横長の古めかしい茶色い腰かけが綺麗に陳列し、何と言つても祭壇  
まで続くレッドカーペットの先にある人生初めて見るステンドグラ  
スが圧巻だった。

「何ともまあ～神々しいなあ」

僕は思わず口に出してしまった。

背中から純白な翼が生えた天使と思わしき女性の両腕に薔薇のツ  
ルが絡み吊し上げられており、華奢な両足には重りが付けられて身  
体の自由を奪われながらも微笑んでいた。

「ん？」

ステンドグラスから差し込む神々しい光の下で膝を付き、祈りを  
捧げる人物がいた。濃い紺色の服装からしてシスターさん（？）だ  
と認識した。

「どうかしましたか？ 迷える子猫ちゃん」

僕の気配に気づいたのか突然、シスターさんは祈りをやめてこちらを微笑みながら振り向いた。

「邪魔しちゃいましたか？」

そう言いながら僕は辺りをきょろきょろと見渡しながらレッドカーペットを歩きシスターさんの元へ足を進める。

「そうですねえ～」

シスターさんは立ち上がりながらそう呟くと、

「ちよつと、よかつたんじゃないでしようか？」

顎に指を添えて微笑みながらそう続けた。

ふむ、なんだかミステリアスな感じの人だな。服装がら顔でしか

判断出来ないが、少し幼さが残る顔立ちから推測するに同じ年か年下？まさかの年上って事はない、よな……。  
でも、同じ年だろうが年下だろうが敬語を使いたくなるのはなぜだろう？

シスターさんだから？

それとも、彼女が少し幼さが残る顔立ちの割に年上と思わせるような大人な雰囲気を漂わせているせいか？

ふむ、それにしても修道服が似合つてゐるな～。

彼女のためだけにこしらえられた衣服に思えた。何もかもを包み込むような優しい笑顔が要因なのかも知れないな……。

「私の顔に何か付いてますか？ 迷える子猫ちゃん」

まじまじとシスターさんの顔を見ていたのがバレたのかそつと聞いてから何の計らいかは分からぬが顔を近づけてきた。

吐息が掛るか掛からないかのすんでの所まで顔を近づけて来るもんだから、僕の心臓はバクバクである。

「いえ、何でもありません。って、さつきから気になつてたんですけど『迷える子猫ちゃん』じゃなくて『迷える子羊』じゃないですか？ それに子猫ちゃんって主に女の子に向けて使つ言葉だと思うんですけど……」

僕は冷静を装いながら視線を逸らして誤魔化すようにシスターさんにそう告げる。

「ふむ、言われてみればそうかも知れませんね。じゃ～訂正しますね。迷える子犬君」

と、満面の笑みで名称を変えてきたシスターさん。  
う～ん、悪気はないんだろうけど何だろうかこの納得しかねる気持ちは……。

「どうかしましたか？」

「いえ、何でもありません」

「そう、ですか？」

首を傾げて少し不満気な表情を浮かべるシスターさんは僕は吹け  
もしない口笛を吹いて誤魔化してみる。

「 神に誓つてですか？」

僕の不審な行動を怪しんだのかシスターさんは眉をひそめて、地  
の利を生かした最凶の詠唱魔法を唱えてきた。

「 天国にいる ジヨンに誓つて……」

うん、自分自身にツツコミを入れようと思う。ジヨンって誰だ?  
「……分かりました。そのジヨンさんに免じて信じましょう」「  
ようやく納得してくれたシスターさんは静かに微笑んでくれた。  
良かつた。これで天国にいるジヨンも報われるな……。

うん、分かつてゐるつて。やればいいんだろ?

せえーのつ！……ジヨンつて誰だよ。

「さて、迷える子犬君は一体何の為にここに来たのですか？」

「ん~単なる寄り道、かな？」

「寄り道、ですか……？」

寄り道つて言葉に引っ掛けたのかシスターさんは俯き少し険し  
い表情を浮かべた。

さつきまでのミステリアスの雰囲気から少しピリッとした感じが  
見受けられる。やはり、お祈りの邪魔をしてしまった事を怒つてい  
るのだろう。いくら聖職者だろうと寄り道を理由に大事なお祈りの  
時間を邪魔されたんだ、怒つてない訳がないだろう。

「すいませんでした……」

僕はシスターさんに深深くお辞儀をした。  
それぐらいの事をしたのだから当たり前だろ?

「……えつ？」

僕の行動を見てシスターさんは呆気にとられたのか少し間の抜けた声を上げた。

「いや……やっぱりお祈りの邪魔をしてしまった事を不快に思っているんじゃないかと思つて……」

「いえ、そういう事じやないんですよ。うん、そうですね……。これも何かの縁ですし、迷える子犬君は何か悩み事は無いですか？」顎に指を添え少し首を傾げてシスターさんは僕にそう尋ねてきた。

「悩み事です、か……」

ふむ、突然そんな事を聞かれてもなあ。ここはあれが、悩み事が無いのが悩み事なんですよって、茶田つ氣たつぶりで言つ所、か？

「あひ、ひなみにですよ。悩み事が無いのが悩み事とか言つのはなしですよ。君は見るからに捻くれた方のようですし」

シスターさんは眉間にしわを寄せジト目で僕の事を見つめてきた。「そ、そんな訳ないですよ。僕は正直者で名が通つてますよ。そうですね、悩み事じやないんですけど、あのステンドグラス」たまたまさらうけど、考えていた事が見抜かれてしまい僕は少し焦つてしまつた。

誤魔化すために少し声が上擦つてしまつたけれど、咄嗟にしては好プレーだったと自画自賛してみる。

「ああ、あれですか。私には理解出来ませんね……」

「え？ 何ですか？」

露骨に不快感をあらわにしたシスターさんに僕は首を傾げて尋ねる。

「腕と足を縛られて笑みを浮かべているんですよ。ありえないですよね？ 普通、亀甲縛り+吊りし上げにボールギヤグを施されやつと悦を感じられるかどうかっていうのに……。全く、甘いです

よ」

真顔でそう語る聖職者。いや、性職者に僕は少し立ち眩みがした。全く、どこが好プレーだ。失策じやないか。好プレーだと自画自贊していた数秒前の自分が恥ずかしい！

ん？ 今のはさりげなく自分の性癖を暴露 いや、考えすぎだ……。

「まあ～今のは冗談ですけど、あら？ 少々し残念そうな顔をしますう？」

不気味な笑みを浮かべてシスターさんは僕の顔を覗き込むように詰め寄ってきた。

「まさか、僕は紳士ですよ。そんな訳ないです」

思わぬ問い合わせに少し後退しながらも首を振つて否定する。

この人、狙つてやつているんじゃないだろうか？

「それはさておき……」

馬鹿な流れを変えるかのようにシスターさんは手を叩いて一拍入

れた。

そして、瞳を閉じて小さく息を吐いた後に瞳を開いたシスターさんの雰囲気が先ほどのお茶濁けたモノからキリッと真剣な雰囲気へと変貌した。

僕はシスターさんの真剣な眼差しに息を呑んで、こちらもそれなりの対応を取らねばと心を落ち着かせて臨む事にした。

「……迷える子犬君は探し物はありますか？ 例えば、自分探しとか」

「いえ、特には。それに自分を見失うほど落ちぶれちゃいませんよ。たぶん……」

「なるほど……」

僕の返答に対しても真剣な面持ちで頷いてみせるシスターさんに僕はこの質問には何かそこまで考えさせるほどの真意が隠されている

のかと思い、聞いてみる事にした。

「あの～頷いてますけど、この質問に何か意味はあるんですか？」

「あつ、特にないですよ」

「ないのかよ！」

あつ、思わずタメ口でツツコミを入れてしまつた……。

いやいやいや。あの真剣な表情で質問されたからには何か思惑でもあつたのかと思うだろうに普通。でも、蓋を開けてみると何もなつて そりや～反射的にタメ口になつてツツコミを入れてしまつた。ダメでありますぜ、ダンナ～。

「ふふふ、やつと本性を現しましたね。さつきから気になつてたんですよ。その不似合いな敬語」

身体を震わせながら不気味に微笑むシスターさんの姿がそこにはあつた。何て言うか、してやつたりと言つた感じで僕の事を見つめていた。

「……そんなに違和感ありましたか？」

「ええ、大あります。大人の遊園地と謳つておきながらその中で繰り広げられるイベントの数々が全て幼稚染みてるぐらい違和感があります」

ブンブンと少しお冠なのか頬を膨らませながらそう述べた。

そんな彼女に対して額を押えて頭を悩ます少年が一人、大きな嘆息と共にがつくりと肩を落とす……。

えつと……これはどう処理をしたらいいんだろうか？ この人が言つ、大人の遊園地つて言つのは疲れた体を癒す大人たちの最後の楽園（ただし、有料）の事だろ？

それにシスターさんが発した言葉から推測するに 大人たちが唯一幼少期に戻る事が許される場所のようだ。

ふむ、だつたら僕に言える事はただ一つだな……。

「シスターさんが言うそこは大人の遊園地じゃなくて大人の幼稚

園の事じゃないかな？」

うん、実に柔軟に表現された言葉なんだろうかと、自画自賛してみる。

僕の言葉に納得してくれたのか、シスターさんは感慨深く頷いて「なるほど」と小さく呟いていた。

「……つまり、幼稚プレイ専門の場所って事ですね」

真顔で述べられたその言葉に僕は膝を付いて崩れ落ちる。気のせいか、少し口の中が鉄っぽい味がした。ああ、これが大人の味と言う奴か……。

しかし、この人……折角、僕が柔軟にフォローしてまとめてあげたと言うのに全て台無しにしやがった。それに膝を付いて崩れ落ちた僕の事を不思議そうに首を傾げながら見つめるその様に少し憤りを感じずにはいられないな。

何なんだ？ ワザとやつてるとか？

それとも、天然でやつてているのか？

もう、訳が分からん……。

「……あの～どうかしましたか？」

そんな僕に少し心配そうな表情を浮かべながらシスターさんが話しかけてきた。

いかんいかん……。僕はもう少し、クールだつたはずだ。なのにここに来てからペースが乱れまくっているな。まるで、水無月姉弟（特にアスカ）と接しているみたいだ。

なんつうか手応えがないんだよな～。ひらりとかわされているって言うより軽くあしらわれているような感じで……。

もう、いいや。敬語なんて使っているからペースが乱されているんだな、きっと……。

「……ああ、大丈夫だ」

僕は敬語を諦め、タメ口でそう答えた。そして、身体を揺らしながらゆっくりと立ち上がり平然を装つ。

「それから、お暇しようかな」

立ち上がり際にそう告げるシスターさんはさきよととして少し間の抜けた表情を浮かべた。そんな彼女の態度の僕は首を傾げる。

「もう、帰っちゃうんですか？」

少し名残惜しいのか上目遣いで訴えかけて来たシスターさんに不覚にもドキッと動悸がして、少し顔が熱くなつた。

「いや……ほら、あまり長居したらシスターさんに迷惑かなつて少し心もとない態度ながらも照れてしまつたのを上手く誤魔化せたと思う。その僕の言葉にシスターさんは納得してくれたのだろうか、軽く頷いてみせた。

「……そうですね。お互い、色々と都合がありますし、ね」

「……か物寂しさを彷彿させるかのよつた憂いた表情を浮かべながら話したシスターさんの印象が何か妙な違和感を感じられずにいたれなかつた。

まるで、これが最後のお別れのよつたそんな錯覚を思わせた。

「……じゃ、僕はこれで」

「はい、お見送りをします」

ゆつたりとした足取りで僕たちはレッデカーペットを歩き、板チョコがそのまま取り付けられたような扉のノブに手を伸ばしてゆっくりと扉を開けた。

扉を開けた瞬間、日の光がちょうど真正面から差し込み思わず目を細め、手で少し遮る。

「それじゃ、また」

「……近いうちにまたお会いましょう」

小さく手を振つて微笑みながらシスターさんに見送られながら僕

は不思議な雰囲気を漂わす教会を後にした……。

翌日。

毛布の心地の良い感触を名残惜しみながら今日から始まる新学期……。

僕は無事、進級をして本日から一年生となる。しかし、特にこれと言った特別な思いがある訳でもなくいつも通りの朝を迎える。一階にある自室で、ある程度の支度を整えてから一階の居間にいつも通りに向かう。

居間のテーブルに置かれた朝食を時間たっぷり使って食べる。普段なら悠長な事をしていられないかも知れないが今日は午前中、始業式をやる事になっている。

だから、僕は始業式だけをすっぽかしてどのクラスに編成されるかを確認しに行くだけの予定を立てていた。

別段、始業式に行かなきやならんほど重要な事でもないし、僕と同じような考えを持つ生徒が他に結構いたりする。

ふう、そろそろ行くとしようか……。

僕は食べ終わった食器を水でさらして、後で洗えるように施しておぐ。そして、少しダルさが残る身体に鞭を打ちながらのそのそと玄関に向かって進み、家を後にする。

ラッシュ時を大幅に過ぎた時間帯に家を出たものだから、通勤学者はほとんどいない少し寂しい道中を黙々と何気なく歩く少年が一人……。

見渡す限り人っ子一人、車一台も通らない道を歩く様は何だかこの世界の最後の生き残りのような錯覚さえ感じた。この静寂さがそう強く思はせているのだろうか、それとも……。

そんな馬鹿っぽい考えを巡らせている内に僕が通う平々凡々な公

立高校に辿りついた。

ちょうど始業式が終わったのか、生徒達の憩いの場所たる中庭に人がぞろぞろと集まり出していた。その中庭に僕が求めるモノがある。

僕は人ごみを搔き分けながら校舎の壁に沿つて置かれたクラス表を覗き見ようと、試みたその時、背後から誰に思いつきり引っ張られ後ろに戻された。

不快感をあらわにしながら僕はそいつを睨みつけるために振り返る。すると、ニヤニヤと氣色の悪い笑みを浮かべている見慣れた輩がそこにいた。

「キ～サラく～ん。お前、また式をばっくれただろ」

僕の肩に暑苦しく手を回して、氣色の悪い笑みを近づかせて来た男子生徒、水無月アキトが苦言を呈してきた。

「別にいいじゃん。そんな事よりも僕はどのクラスになつたか確認しなければならん」

「ああ、それなら心配いらないぜ。俺達一緒にクラスになつたからな」

「はあ？ お前と一緒に？」

「そう、それと姉貴も一緒にだぜ」

「マジか……」

アキトの言葉を聞いて僕は愕然とした。別にアキトと同じクラスになつた事を嘆いた訳ではない。むしろ、後者の人物に対してもだ。

水無月アスカ 一年の時もそうだったが、まさかまた同じクラスになろうとは思いもよらなかつた。誰だ、このようなクラス分けをした輩は……。僕に何の恨みがある？

それに片割であるアキトまでもが一緒にクラスとなると、思い当たる節は一つしかないなよな。暴君の抑止力たる生贊を一名用意しあつて所、か……。

はあ～。急遽、親の仕事の都合が何かで転校出来ないかな……。

「ん？ どうしたんだ、キサラ」

「いや、転校ってどうやつたら出来るのかなって」

「……登校初日からお前は一体何言つてんだよ」

「……お前、アスカと同じクラスなんだぞ。その意味分かっているのか？」

「……それを言つなら俺なんか姉貴と血の繋がつた姉弟だからな。だから、キサラの一、二年間なんて俺にとつたら一、二分程度だ。我慢しろ」

「ねえ～。何を我慢しろつてえ～？」

『うわっ！』

聞き覚えのある女の子の声が聞こえて、僕達は思わずワザとらしいリアクションをして驚いた。

そして、恐る恐る声が聞こえた後方へと視線を向けるとそこには怪しい笑顔で僕達を見据える美少女が いや、美少女の皮を被つた鬼神がそこにいた。

鬼神は僕達の肩を人知を超えた力で握りしめて、その苦痛に僕達は表情を歪める。

「あ、アスカ様いらつしゃつたんですか……」

「お、お姉たま。ご機嫌麗しゅう……」

「あら？ 二人とも普段と口調が変わつていてるけど、どうかしたのかなあ？」

不気味に微笑みながらそう話したアスカ様はさらに力を込めて僕達の肩を握りしめる。僕達の肩からパキポキと怪しげな音が鳴り始めた。

アスカの人知の超えた力で肩を握りしめられているせいで僕達の肩が限界に達して悲鳴を上げているようだ。それに身体から変な冷

や汗が流れ始めている。

ふむ、このままでは粉碎骨折へ直行か……。南無～だな。  
すると、唐突に大きな溜め息を吐いたアスカは僕達の肩から手を離した。解放された僕達の肩は粉碎骨折を免れたが、未だに激痛が走っていた。

「まあ～いいわ。そんな事よりも私達のクラスに転入生が来るみたいなのよ」

少し興奮気味に語氣を強めて発せられた言葉からは何かを期待しているのか、ウキウキ感が伝わってきた。

「ああ、俺もその話を聞いたわ。何でもかなりの美少女らしい」「へえ～。転入生ねえ～。何でまた？」

「そんな事知る訳ねえ～だろ

「まあ～確かに」

「でも、気にならない？ その美少女と謳われている転入生が果たして、私の地位を脅かすほどの美少女なのかって」

真顔で自意識過剰発言をした少女に僕は思わず口を開けて馬鹿面をさらしてしまった。

いや……確かにコイツがこういう性格だつて一年も付き合ついたら必ずと分かつては来るが、こうも堂々と公言されちゃ～どういう反応をしていいか分からなくなるだろ？

アスカが外見上、非の打ち所のない美少女なのは確かなのだが、中身がな……。ワガママ姫と言うかおてんば姫と言うか、まあ～一言で纏めるなら暴君、独裁者だな。

そんな彼女の被害を一番に被つているのは弟のアキトかも知れないが、僕もその一人になりつつあるな。いや、もうなつているか……。

僕が馬鹿な考えにふけつているとチャイムが辺りに鳴り響いた。

「やべ、そろそろ教室に行かないと」

チャイムの音を聞いたアキトが辺りを見渡しながらそう呟く。

「そうね。アキ、シゲル。さつさと教室に行くわよ」

アキトの言葉に頷きながらアスカは僕達に行くように促す。その言葉に僕達は軽く返事をしてから自分達の教室へと足を進めた。

僕は新しい教室の場所が分からぬため、水無月姉弟の後を追うように歩いた。廊下を歩き階段を上がって、また廊下を歩いて辿り着いた三階のある教室。二年C組と表札がぶら下がっている教室に入り、黒板に名々が座る座席表が描かれていた。

僕の席は幸運な事に後列の席だった。でも、その束の間の至福は無残にも打ち破られてしまう。僕の席は中庭を臨める窓側の席（黒板を正面に左）から一番目の席で、そこまでは良かった。だが、その席の左隣にはあの暴君が座り、暴君の前にはアキトが座った。なんつうシフトだ、と僕は思った。

僕とアキトで暴君の妨げを担う最後の砦として敷かれた布陣みたいだ。

ホント、僕に何の恨みがある？ 悪意を感じられる。

しばらくしてからこのクラスの担任教師らしき人物が現れた。何の特徴もない平々凡々な中年男性だった。

ん？ そういえば……僕の前の席が空いているみたいだけど、まさか転入生の席って事は無いよな。いくら何でも初見の方には荷が重すぎる席だと思うぞ。特に左斜め後ろの要注意人物がな……。

「じゃ～予め聞いていると思うが転入生を紹介する」

教卓の前で担任教師がそう宣言した瞬間、クラスメイト達が一斉にざわざわと騒ぎ始めて色々と憶測を流し始めた。

ある男子生徒は帰国子女なんじゃねと話し。ある女子生徒はどこの国のお姫様なんだってと話す。

ホント、どれもこれも馬鹿な推測でこの国は平和だなあ～と僕は

年寄り臭くしみじみと思っていると、ガラガラと音を立てて前の扉から綺麗な黒髪をなびかせながら凛々しい物腰でゆっくりと入ってきた噂の転入生さん。

少し幼さが残る顔立ちで血が通っているのかさえ分からなくなるほど透き通るほど白い肌質、すらりと伸びた手足のスレンダーな体躯 うん、噂通りの美少女なんじゃないかなと思つ。アスカの地位（？）を脅かすかどうかはさておき……。

少女は凛々しい物腰でゆっくりと教卓の方へすたすたと足を運ぶ。そんな少女の姿を目の当たりにしたクラスメイト達は先ほどまで騒がしかつたのにも関わらず、一瞬にして物静かになった。教卓まで足を運んだ少女は黒板に自分の名前らしきモノを書き始め。書き終わつたのか、こちらを振り向いた少女の顔はどこか物寂しげな表情を浮かべていた。

ふむ、気苦労が絶えないのかね、なんて、考えながら少女の背後にある黒板に目をやる。そこには時雨悠じくれはるかと振り仮名まで丁寧に書き記していた。

「私は……」

自己紹介をするのか唐突に声を上げた少女だったが、途中で口ごもつた。

うん、大勢の前で自己紹介する事になつたんだ、緊張しない方がおかしいだろ。

少女は気持ちを切り替えるためか、瞳を閉じてゆっくりと深呼吸をした。そして、ゆっくりと瞳を開いて、

「私は……私を殺せる人を探しにここへ来た」

と、冷たい眼差しで淡々とそう語つた……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0270ba/>

---

メモダス

2011年12月31日19時48分発行